

No
40状況に応じて、自分にできることはどんなことかを考え、やってみる。
…人とのかかわり…ドッジボールをやりたい！ ドッジボールが盛んな頃、
1週間だけ遊戯室が使えなかったときの事例 2月

☆ 視点に関わる背景（10月からの状況）☆

- 園の最年長者としての役割を感じながら運動会や発表会などの園行事を経験してきたことで、1つの目標に向かって友だちと協力し、みんなで達成感を味わうことの楽しさやうれしさを感じられるようになってきた。
- 5歳児後期になると協同的な遊びが盛んになる。その中で幼児は、友だちと目的を共有し、その具現化に向けて様々な試み、時には葛藤体験を経て、達成感や満足感を共有することを繰り返し楽しむようになる。目標を具現化する過程では、幼児が今までの経験を総合的に振り返りながら自分なりに工夫することを喜んで経験している。

☆ 接続期の状況（自由遊びの時間～）☆

子どもの姿・子ども同士のかかわり

保育者の援助・視点

- 園行事のため本日より1週間遊戯室が使用できない中、ドッジボールをやりたい数名が、遊戯室の1/4程度の場所をみつけてドッジボールを始める。しかし、極端に狭いため、やりにくさを感じている。
- 「球の速さを落として遊ぶ」というルールに変更するが、盛り上がりらず、ほとんどの子は遊びから離れる。
- A男の提案で、ボールをスポンジボールに変えると、遊びやすくなり仲間が増える。ところが、ボールが当たった感覚が分かりにくく、言い争いから仲間が減り、結局、数名で遊び続け、翌日も同様となる。

<3日目>

- 新聞紙を丸めたものにクラフトテープをはってボール（野球ボールのサイズ）を作ったBの提案により、ゲームが始まる。
- スポンジボールより球感があり、一時的に仲間が集まったが、球が小さいため、遊びの盛り上がりに欠け、トラブルも発生する。
- しばらくして別の子どもから、提案がある。
C：そうだ！(粘着)テープを変えれば良いんじゃない!!
- Cは、梅雨時期に、新聞紙と布ガムテープでボールを作り、今と同じ場所でサッカーをして遊んだことを思い出し、一人、保育室に行き、新聞紙と布ガムテープを使って新しく球を作って持ってくる。
C：ねえ、みんな！今度は、こっちのボールでドッジボールしてみようよ！
A：わあ、本物のボールみたい！
D：球も速くていいね。

スポンジボールやBが作ったボールに比べて重さも出たことで、球感もあがり、遊びが盛り上がる。その後も、仲間を増やし、みんなで充実して遊びを楽しむ。

- Bが、過去の経験から、ボールを小さくすれば遊びやすくなると思いつき、作っていると推察した保育者は、ボールのサイズや質が適していないと思ったが、あえて言葉はかけず動向を見守る。
- 保育者は、Cが、Bの作ったボールでの遊び辛さと、遊び方を工夫してもっと楽しみたいという欲求との間で葛藤していることを感じつつ、新しい方法を見つけて提案することを期待しながら見守る。



- 保育者は、Cが、完成したボールを持って行き、遊び始めたところで「よく気がついたね！」と、みんなの前で褒める。このタイミングで言葉をかけることで、この数日の葛藤体験は、居合わせた幼児みんなの達成感となる。

☆ 接続期の指導場面における配慮事項 ☆

接続期には、自分たちの力で生活する楽しさを十分に感じられるようになるので、保育者は、幼児への提案を最小限にし、「見守る」ことを主としてかかわる。「見守る」とは、ただ見る・居合わせることではなく、これまでの幼児の観察に基づく、保育者による行動の予測の上に成り立つ。幼児の導いた結論が、失敗の予想されることであっても、失敗から学ぶこともあるので口を挟まないようにしている。

協同的な遊びの中での葛藤体験は、人とかかわる力や状況の変化に適応できる力を蓄えていくことにつながる貴重な体験となるので、葛藤を感じながらも、遊びを続けたいという気持ちが持続するように配慮している。特に、葛藤体験後の達成感は、更なる自信となるので、幼児がじっくりと考えて自分なりの答えを出すまで待ち、認めたり、褒めたり、共感したりしながら、繰り返し挑戦するよう促している。